

## 佛足石記文の撰述態度について：『西域傳』の引用に関して

著者	廣岡 義隆
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	6
ページ	41-46
発行年	1995-06-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/6483">http://hdl.handle.net/10076/6483</a>

# 佛足石記文の撰述態度について

—「西域傳」の引用に關して—

廣岡 義隆

奈良市西ノ京の薬師寺に安置されている佛足石の周圍に刻まれた記文については、『古京遺文注釈』（注一）でその注解を試みた。しかし、不満に思うところがあり、目下掘り起こしの作業をしている。本稿は、その作業過程における中間報告である。

佛足石記文について先ずその概略を示しておく。佛足石の上平面に佛足跡が刻まれ、その四周に刻字がある。これが佛足石記文である（注二）。正面（これをA面とする）は佛足跡禮拜の靈驗・功德を『西域傳』『觀佛三昧經』からの引用によって説くものである。左側面（B面とする）は佛足跡を彫るに至った由来縁起で、天平勝寶五年（七五三）七月に彫られたものであることを伝えている。裏面（C面）は願文であり、右側面（D面）は三法印の偈が記される、という構成になっている。

A面の引用書『西域傳』については、玄奘詔譯・辯機撰の『大唐西域記』と考えられる。『徒然草』第百七十九段に出る「西域伝」も、『大唐西域記』のこととしている。このように

「西域傳」と言えば『大唐西域記』のことと見るのがまず一般的な考えである。しかし、その本文は『大唐西域記』とまったく対応するものではない。狩谷敏彦は「與西域記法苑珠林畧同」と注するが（注三）、同じ頃、釋潮音は『西域記』『慈恩傳』『釋迦方誌』『法苑珠林』やその他の諸書を博搜し、「考紀文所引、不似西域記文、稍合釈迦方誌・法苑珠林所収文。」とする（注四）。その後、三宅米吉が『法苑珠林』を引いて言及し（注五）、菊地良一がこの典拠を『法苑珠林』であるとし（注六）、宮嶋弘は『釋迦方誌』が最も銘文に近いが『釋迦方誌』以外にも『大唐西域記』や類書を参考にしたと考説した（注七）。以後、保坂三郎（注八）・橘健二（注九）・加藤諱（注一〇）・松久保秀胤（注一一）に若干の考察がある。私は、『古京遺文注釈』の中で、「あれこれの書を案じつつ成ったものではなく、依拠した一書があったもの」と推定し、これを『佚西域傳』と想定した。

『法苑珠林』は、「西域傳二云」とある条（卷第二十九、聖迹

部第二。『大正新脩大藏經』第五十三卷四九六頁下段（以下、

「大正藏・53・四九六下」と略称）に出ている記事である。

また『釋迦方志』の該当条は、『大唐西域記』同様に、『摩揭陀國』（遺跡篇）の箇所に出てくる記事である（大正藏・51・九六一中）。『釋迦方志』はその序の中で、「彦琮著西域傳一部十篇」（大正藏・51・九四八中）と他のテキストに触れはするが「失於信本」としているので、『釋迦方志』の依拠本は「玄奘著西域傳一十二卷」（同書、「遊履篇第五」。大正藏・51・九六九下）と思われる。この「玄奘著」の「西域傳一十二卷」とは玄奘の『大唐西域記』（一十二卷）に違いない。

『法苑珠林』と言い、『釋迦方志』と言っても、共にそれらが引いている「西域傳」をさしているものであり、『法苑珠林』や『釋迦方志』はその所収本であるわけである。

しかし、この『法苑珠林』には、佛足石記文のA面後半部分（A8〜12）及び（A12〜14）の本文に該当する箇所が見られない（「A8」とは佛足石記文の「正面（A面）八行目」を指すものである。以下同様）。これが最大の難点で、『法苑珠林』に依拠していると言うことはできない。宮嶋弘が言うように、『釋迦方志』の「摩揭陀國」条が一番近い本文となる。

ところがこの『釋迦方志』よりも『法苑珠林』所収の「西域傳」の方が佛足石記文に近い箇所もあるのである。このような状況から、私は『佚西域傳』（今は散逸して残っていない「西域傳」）の存在を推定したのであった。この『佚西域傳』依拠

とする私案を変えるつもりはない。

しかしながら、先の『古京遺文注釈』執筆時には『佚西域傳』に全面的に依拠して佛足石記文の「西域傳」の条は成ったものと想定していた。しかし、考察を進める内に、佛足石記文の撰文者（注一二）における整齊の手が髣髴としてきたのである。座右の書は『佚西域傳』の一本ながら、行文を丸写しして行くというのではなく、整齊しながら撰文していった痕跡が見うけられるのである。これを、A面冒頭部の該当条を取り上げて、考察して行く。

『大正藏』本文による『大唐西域記』『法苑珠林』『釋迦方志』諸本と佛足石記文との比照作業は済んでいるが、紙幅上の都合もあり、これをここに掲げることにはせず、A面冒頭部の個別事項を取り上げることにする。

### 【有一大國】（A2）

このところ『釋迦方志』『法苑珠林』『大唐西域記』（以下、引用はいずれも『大正藏』による）の三本ともに該当本文は「有大石」となっている。佛足石記文だけは「一」が加わって四文字になっている。扱この「一」の字は、『佚西域傳』に存した文字であるのか、それとも佛足石記文撰文時の文飾であるのかということが問題となってくる。

そこで当該の『西域傳』にかかわるA面の佛足石記文を省いて、他の本文の字数句を一覧してみたのが次である（注一三）。

觀佛三昧經云／若人／見佛足跡／內心敬重／无量衆罪／由此而滅／今□值圖／非有幸之所致乎 (A6) (8)

觀佛三昧經／佛在世時／若有衆生／見佛行者／及見千幅輪相／即除千劫極重惡罪／佛去世後／想佛行者／亦除千劫極重惡業／雖不想行／見佛迹者／見像行者／步步之中／亦除千劫極重惡業／觀／如來足下平滿／不容一毛／足下千幅輪相／較輞具足／魚鱗相・次／金剛杵相／足跟亦有／梵王頂相／衆蠶之相／不遇諸惡／是為休祥 (A14) (20)

知識家口／男女大小 (B界外) 三國眞人淨足 (B界外)

大唐使人／王玄策／向中天竺／鹿野園中／轉法輪圖／因見跡／得轉寫搭／是第一本／日本使人／黃書本實／向大唐國／於普光寺／得轉寫搭／是第二本／此本在右京四條一坊禪院／向禪院壇／披見神跡／敬轉寫搭／是第三本／從天平勝寶五年／歲次癸巳／七月十五日／圖廿七日／并一十三箇日作了／檀主從三位智努王／以天平勝寶四年／歲次壬辰／九月七日／改王字成・文室眞人智努／畫師越田安万／書寫神石手／□呂以足／匠因□ (B1) (17)

至心發願／為亡夫人／從四位下／茨田郡主／法名良式／敬寫釋迦如來神跡／伏願／夫人之靈／駕遊入无勝之妙邦／受之聖□／永脫有漏／高證无為／同霑三界／共契一

眞

諸行无常／諸法无我／涅槃寂靜

(C1) (12)  
(C1) (3)

A面の「觀佛三昧經」(觀佛三昧海經)は原典が四字句を基本にしているので決め手に欠けるが、B面以下からこの佛足石記文は四字句を基本として撰文されていることが明らかとなってくる。全てが四字句ではなく、時に六字句や八字句また非整齊句を混じえているが、四字句がこの佛足石記文の基本文型になっていることが理解できよう。このことと、「西域傳」に近い三本(釋迦方志・法苑珠林・大唐西域記)共に「有大石」の本文であることを考えると、四字句としての整齊は、佛足石記文撰文時のものと見た方がよいであろう。

#### 【一尺八寸】(A3)

この箇所は三本は次のようになっている。

「尺有八寸」——『大唐西域記』

「尺八寸」——『法苑珠林』

「尺八」——『釋迦方志』

『大唐西域記』が四字句の「尺有八寸」であるのに、佛足石記文が「一尺八寸」であることは、佛足石記文が『大唐西域記』に依拠してはいないことを意味している。恐らく『佚西域傳』には「尺八寸」或いは「尺八」とあったものを、佛足石記文の撰文時に「一尺八寸」の四字句に整えたものと推測される。

#### 【足所蹈處】(A4)

前稿(古京遺文注釈)では次のように記した。

「所」を助辞と見、「所蹈」の二字で「ふむ」と訓み、完了の「り」を訓み添えた。

この箇所は、一見、「所蹈」の二字で「ふめる」と訓むことが可能なようであるが、「所」字の訓「る」は自発・可能等の意であり、しかもその場合未然形接統の「ふま・る」としななければならない。この場合は完了の意であるから、「所蹈」の二字で「ふむ」と訓み、完了の「り」を訓み添えていると解したのであった。かくして「足（ニテ）所蹈ル處」の意となり「足、所蹈（ふめ）ル處（ところ）」の訓となるのである。

現、この箇所、

「蹈此石上吾今最後留此足迹」——『大唐西域記』

「故蹈石上之雙足迹」——『法苑珠林』

「故蹈石上之雙跡也」——『釋迦方志』

とあって、「所蹈」の表現は三本共に存在しないのである。

この「所蹈」の表現は、四字句に整齊する作業の過程で出てきたものであろう。なお推考すると、これは佛足石記文撰文時における整齊の可能性が高いことから、本邦の人による表現となり、「所蹈」の「所」を「る」と訓ませた一種の誤用の可能性が出てくる。「ふま・る」の「る」を、「ふめ・る」の「る」に借用した誤用である。となると、これは当初考えた「所蹈」の二字で「ふむ」と訓むとは違って、誤用に基づくものであり、「所」字における和臭用法と言うべきものとなってくる。

【不信正法】（A5）

この句は『大唐西域記』『釋迦方志』『法苑珠林』のいずれの該当箇所にも存在しない。『佚西域傳』に依拠した句の可能性もあるが、撰文者の手も考えられよう。

【還生文相】（A5）

他本は次のようになっている。

「還平文彩」——『大唐西域記』

「還平文采」——『釋迦方志』『法苑珠林』

「還平」の「平」は「平復」の「平」の意かと考えられるが、佛足石記文の「還生」の方が意義がよりわかりやすい直接的な表現になっている。「文彩」「文采」はほぼ同義であり難解ではないが、ここは当記文中の「輪相花文」（A3）に照応させて「文相」としたとする長谷川純子の見解に従う（注一四）。となると「文の相」ではなく「文及び相」の意となる。「相文」ではなく「文相」としたのは「文彩（采）」の語順に倣ったものであろう。

このように見て来ると、この箇所も佛足石記文撰文時に『佚西域傳』の表現を変えて記した可能性が出て来るものとなる。

【又】（A5）

ここは、佛足石記文の本文「又捐□中」を「又捐施河□中」と復元している箇所の用例である。他本の該当箇所は次の通り

である。

「於是捐棄苑伽河流」——『大唐西域記』

「乃捐苑伽河中」——『法苑珠林』

「乃捐苑河中」——『釋迦方志』

しかるにこの佛足石記文は「乃」でも「於是」でもない「又」になっている。「又」は、「復」や「更」の意で使用される字である（「又、復也。」毛詩鄭箋など『經籍纂詁』卷八十五／「又、猶更也。」『廣韻』去聲四十九）。「乃」や「於是」は何の違和感もない用字であるが、「又」は和訓「また」に引かれたのではないかと思われる落ち着かない用字で和臭の感がある。これは、佛足石記文の撰文者による表現辞の可能性がある。なお、「又」の字は佛足石記文中に、もう一か所「又北印度……」（A8）の所で使用されていて、そこも引用文ではない撰文者の用字の箇所である。

【今現圖寫】（A6）

佛足石記文の表現を辿ると、「昔阿育王……」（A2）、

「近爲金耳國……」（A4）、「今現圖寫……」（A6）

と展開されている。これは、

昔……、近……、今……。

という時の觀念に基づく対比的表現の箇所である。

「近……」の表現は『大唐西域記』や『釋迦方志』に、次の通り存する。

「近者設賞迦王」——『大唐西域記』

「近爲金耳國設償迦王」——『釋迦方志』

しかし、「昔……」・「今……」に該当する表現句は『大唐西域記』と『釋迦方志』にはなくて、『法苑珠林』は次の通りである。

又從南行百五十里度苑伽河至摩揭陀國。屬中印度。……中略……昔無憂王作地獄處。……中略……近爲惡王金耳毀壞佛迹。……中略……貞觀二十三年有使圖寫迹來。

（『大正藏』53・五〇二上）

ここに「昔無憂王……」（無憂王とは阿育王のこと）、「近爲惡王金耳……」、「貞觀二十三年有使圖寫……」の表現があり、「貞觀二十三年」を「今」とすると、当佛足石記文に対応することになる。この箇所について、「貞觀二十三年有使。圖寫迹來。」の一文と佛足石記文の「今現圖寫所在流布」とが対応するという指摘を、三宅米吉（注一五）や加藤諄（注一六）が既に行っている。加藤諄には貞觀二十二年の誤りであるとの指摘もある。

ここも佛足石記文撰文者の手が想定できる箇所である。

以上、A面の六行目までに引用される「西域傳」（A2）の記事中から佛足石記文の撰文者の手を探ってみた。単なる引用ではない「撰文」の跡を確認することが出来たと思う。この撰文者の引用態度は、『西域傳』の次に展開される『觀佛三昧海

經」からの引用箇所（A7）において、より著しくなるのである（『古京遺文注釈』②「仏足石記」の「観佛三昧經圖」（A6）の条、一八二頁、参照）。

## 注

一 上代文獻を読む会編『古京遺文注釈』（一九八九年二月）。筆者はこの中で「宇治橋断碑」「仏足石歌碑」と共に「仏足石記」を担当した。

二 佛足石記文の本文は、注一の『古京遺文注釈』或いは「佛足石記・佛足石歌碑本文影復元」（『三重大学日本語学』第一号、一九九〇年六月）に拠りたい。後者は前者を一部訂しているところがある。本稿はこの後者に拠っている。

三 狩谷轅斎『古京遺文』（文政元年刊、一八一八年）。「勉誠社文庫1」所収。

四 釋潮音「佛蹟誌」「佛足跡紀文考證」写本。文政二年、一八一九年。「南都薬師大寺佛足蹟碑文和歌略註」と共に合本され静嘉堂に蔵されている。以下、引用はこの写本によるが、山田貞雄・小杉秋夫による翻刻が出ている。国会図書館本の解題等貴重であるが、残念ながら翻刻に誤植があつて使用は注意を要する。山田貞雄・小杉秋夫「慧海潮音「仏蹟志」の紹介」（『成城文芸』第二〇号、一九八七年七月）。

五 三宅米吉「佛足石」（『考古學會雜誌』一一七、一九九七年）。

『文學博士三宅米吉著述集』下巻所収。

六 菊地良一「佛足石歌の研究」（『學苑』六一五、一九三九年五月）。

七 宮嶋弘「佛足石と佛足石歌」（『立命館文學』一〇一、一九五三年一〇月）。

八 保坂三郎「西京薬師寺 佛足石」（『國華』七五五号、一九五五年二月）。

九 橋健二「薬師寺仏足石銘文」存疑」（『南都佛教』六号、一九五九年）。

一〇 加藤諱「仏足石—日本における—」（『古美術』二四号、一九六八年二月）。

一一 松久保秀胤「佛足石ものがたり」（3）（『薬師寺刊「薬師寺」七号、一九七〇年一〇月）。

一二 吉村怜は、このB面一六行目の「神右手」について詳細に論じながら、その神直石手は書家であり、撰文者は智勢自身であるとした（吉村怜「薬師寺仏足石記と書写「神直石手」について」早稲田大学美術史学会「美術史研究」八冊、一九七一年三月）。その後私は、『古京遺文注釈』で神直石手が佛足石記文の撰文者であらう、と記した。

一三 佛足石記文の表記は異体字の「々々」まで忠実ではないが、日本工業規格（JIS）の、一部異体を含む第二水準に入っている漢字はそれによって、新旧字体の混在という形になっているのはそのためである。

一四 長谷川純子は三重大学大学院生（近代文学）である。大学院科目における発表による。

一五 三宅米吉。注五に同じ。

一六 加藤諱。注一〇に同じ。

〔本学教員〕